



発行日 2003年6月20日

発行人 藤川享胤 編集責任者 浅井宣亮 編集委員 秋 太田 金子 菅原 館盛

発行所 SOTO禪インターナショナル事務局 〒164-0002 東京都中野区上高田1-27-6

Tel. 03-3361-0614 Fax. 03-3361-0634 URL: http://www.soto-zen.net/

郵便振替 00100-6-611195 SOTO禪インターナショナル

Vol.23



SZI設立10周年記念総会集合写真

CONTENTS

- 巻頭 発菩提心ハワイ国際布教総監 町田 時保 1
- 特集 SZI設立10周年記念シンポジウム ハワイ開教100年 現状と未来..... 2
- 海外レポート ハワイ ハワイの病院で活動する宗教者から聞く静岡県法幢寺住職 秋田 弘隆 5
- ドイツ マリア様に抱かれた街で見た禅僧の夢と現実.....SZI会員 穴戸由布子 8
- アメリカの仏教書 アメリカ人の眼に映った片桐老師ヴァレー禅堂 堂頭 藤田 一照 10
- SZI通信 動静報告 12
- 寄付者・会費納入者名簿 12

巻頭

発菩提心

ハワイ国際布教総監 町田 時保



最近の宗報や宗門関係の月刊誌に「私達の宗門は檀信徒の方を向いていない」とする論調が散見されるが、海外での私達の教化活動は「先に寺ありき、僧侶ありき」では教団が成り立たない。僧侶と信徒が互いに求め合うのでなければ寺は存在できない。私は過去三十年間、ハワイ別院の運営に深く関わって来たが、僧侶と信徒との相互の信頼関係が常に問われ続けている毎日である。少しでも信頼関係が崩れれば寺院運営の基盤は忽ち失われかねないのが海外開教寺院の特徴である。この信頼関係とは、端的にいえば「寺が信徒にとって、役に立つ、生活の支えになる、無ければならない存在」であるということである。

今から42年前、1961年の夏、私は独りでアメリカ西海岸を旅行した。サンフランシスコに滞在中、桑港寺を訪ねて鈴木俊隆開教師に出会った。師は日系信徒と向き

合うことの難しさを切々と語っていたが、同時に、白人の参禅者が来るようになって、自分の下手な英語でも聞いてくれると熱心に話された。聞いていた私は同師の誠意あふれる応対に心を打たれたが、その超俗ぶりにも驚かされた。

鈴木師はその後桑港寺を出て師を慕う人達と共に禅センターを開いてアメリカに新しい禅の時代を齎すことになるのであるが、それは後々の話で、未だ無名であり、誹りさえ聞かれた当時の師のアメリカ滞在の真意は、寺や組織をつくることではなく、ただ坐禅を通して人を救いたいという願望だけであった。私は師の何人も追隨を許さない菩提心が今も生き続けてサンフランシスコ禅センターを支えていると信じている。

今年にはハワイ開教百年を迎えるが、それぞれの開教師が信徒に向き合う努力を続けた軌跡を尋ね顕彰したいのが私の願いである。

ハワイ開教100年 現状と未来

2003年2月20日、曹洞宗檀信徒会館において、「ハワイ開教100年 現状と未来」をテーマにSZI設立10周年記念シンポジウムが開催されました。パネリストとして、ハワイに開教または布教所がある仏教系教団の担当者を招き、100名近い参加者ととも「ハワイ布教の意義」そして「人材育成」について活発な話し合いがなされました。

パネリスト

今井真行（日蓮宗宗務院伝道部国際課長）
1988年から8年間開教師を務め、ハワイには4年間在住
設楽 実（真如苑総合企画部広報課）
1996年、1998年各6ヶ月ハワイ布教師
岡本信之（浄土真宗本願寺派大恩寺住職）
1972年から11年間、ハワイ開教師
山本宜亮（立正佼成会松戸教会長）
1984年から10年間、ハワイ教会長
倉岡弘叔（高野山真言宗教学部次長）
開教100周年行事担当
吉田宏得（曹洞宗ハワイ国際布教總監部書記）
1994年から5年間、ハワイ島ヒロ大正寺赴任。その後、曹洞宗ハワイ別院に勤務

企画趣旨

私たち日本民族はヨーロッパ近代史に見る世界的大規模な移民史を、歴史上持ちえません。そうした観点からすれば、ハワイの日系人社会が最も“進化”した日本人移民と言えます。その日系社会や日系寺院が直面する様々な問題点、例えば檀信徒（メンバー）の高齢化と世代交代に伴う文化変容、伝統仏教離れ、言語の問題等多くの課題を抱えながら布教活動しております。これは、曹洞宗のみならず、多くの日系教団の抱えている問題でもあります。

このシンポジウムは、ハワイに地域を絞り、歴史的背景を踏まえつつ「現状と未来」に関して各教団の対応や課題、これからの方針をご報告頂き、これにより一教団だけでは解決できない問題や悩みなどが共通課題として浮かび上がると共に、他宗派とのこうした意見交流の場と必要性を提起することを目的としております。

さらに、今、アメリカ社会の一部であるハワイにおいて展開されている日系仏教が遭遇している数々の問題点を忌憚なく直視することは、一面において今後の日本における仏教には極めて重要なことであろうかと思われま

す。何故ならば、現実のハワイにおける日系仏教が直面している諸問題は、ある面において、日本における仏教のありようについて、極めて示唆的かつ現実的な要素を多分に含んでおり、それはまさに、日本にとってハワイ寺院はアンテナ・ショップ的要素を持つと言って過言ではないからであります。

今井真行（日蓮宗）



日蓮宗の海外布教は宗祖日蓮聖人の「一天四海皆帰妙法」という祖願がございますので、その達成を重要目標として掲げています。ハワイ布教の方向性・方針といたしましては、日系人主体の布教を継続していきながら、将来は現地

の布教師の育成ということが問題となってきます。

人材育成につきましては、半年以上ハワイに派遣し、語学研修などを中心に布教師養成を行っています。また、日蓮宗の開教事業が国際化してきたため、ハワイ・北米・南米だけでは収まらない状況になって参りましたので、イギリスに研修生を送っています。特にイタリアやスペイン、ドイツ、デンマーク、フランスなどの御題目系の団体から日蓮宗になりたいという声が多く聞かれるようになってきたので、開教師養成は急務となっています。

ハワイ開教100周年に向けた事業といたしましては、宗祖立教開宗750年とかねて、2003年6月21日に行う準備をしております。翌22日には、ワイキキのカラカウア通りを通行止めし、万灯講を中心とした平和大行進をする計画をしております。

設楽 実（真如苑）



ハワイについて色々と戦略があるのではとよく聞かれるのですが、実は行き当たりばったりで、国内も海外も、ある程度信者さんができていけば、そこにお寺を建てるということです。

ハワイでは1999年からアラモア

ナビチで灯籠流しをさせていただくことになりました。もともと山梨県の河口湖で灯籠流しを行っていたのですが、ハワイの郷土の方から自分たちの所でも行いたいという念願がずいぶんございましたので始めさせていただきました。アメリカの戦争犠牲者の追悼祈念などがあるため、政治的に問題がないか心配しましたが、現地の人々にも賛同していただくことができ、問題なく行えています。参加者は初年度には5000人程度、現在は3000人程度の信者の参加があり、一般市民を合わせれば4万人程度の参加がございます。

布教師の派遣については6ヶ月交代で行っています。短期間ということで問題もございますが、信者さんが布教師を頼りにしすぎず、自ら力をつけてきたという利点もございます。また、布教師との相性もありますので、人が替わることによって、自分に合う布教師を見つけることができるということもあります。しかし、人材不足の問題があり、広報や庶務の人まで布教師として派遣されたり、ほとんどレクチャーを受けずにいきなり行かされることもあります。ですから受け入れてくれる信者さんに感謝するしかありません。

岡本信之（浄土真宗本願寺派）



浄土真宗は聞法が中心にありますので、話をしなければなりません。「念仏の声を世界に子や孫に」をスローガンに日系人だけでなく、できるだけ多くの人にということで活動を行っておりますが、言葉の問題が大きな問題となっています。日本から派遣されていく人は、教学の力があっても、それをどう英語で伝えられるか、また二世・三世の人が開教師になりたいというときに、日本に来て、日本語で勉強するというのも時間がかかりますし、その人の能力の問題もあり非常に難しいわけです。また、現在、ハワイの開教師として、白人1名、二世18名、三世4名、日本からの派遣1名いますが、開教師同士のコミュニケーションの持ち方も難しい問題があります。

人材育成に関しては、現地の人たちの養成として、1972年よりBSEというハワイ大学の側にスタディーセンターを開き、浄土真宗だけでなく、仏教全般、日本の文化や歴史などを学べるようになっていきます。また、ハワイには本願寺の私立学校として小学校と中学校が30数年前からございますが、今年の9月から高校が開校さ

れる予定になっています。開教または布教の流れ、歴史を振り返ってみても、アメリカやハワイで教えが広まっていくには、50年100年では難しい。100年どころか、200年、300年あるいは700年800年という月日が必要ではないかというような風にも思えます。だから子供たちの教育から始めようということになっています。

ハワイで直面した、様々な問題は、日本の問題でもあると思っています。日本でも自分の信ずるところや大きな安心、力などがぐらついているのではないかと思います。そういう中でいくら開教ということも思っても、本当のものが果たして伝えられるのでしょうか。自分の喜ぶところ、信ずるところを伝えたいという熱情・情熱こそ、必要なのではないのでしょうか。

山本宜亮（立正佼成会）



東京の本部に海外開教グループとして専門スタッフが置かれ、国内・海外布教と部門で衣衾になっており、その中で知識が共有されています。現在ではほとんどの布教師が本部の職員として送られて

いますが、現地の言葉を話せる職員というのも限られています。

立正佼成会の海外布教としては、宗教教育に力を入れております。現在のところハワイの信教者は300世帯ほどでございますが、ハワイには具体的な教育機関はございません。しかし、サンガの仲間がメイランドの教会との連携の中でいろいろな教育が随時行われております。そして、宗教儀礼に関しては、日本の本部に来て、灌頂などの授与がされております。また、最近ではアジアからの研修生を受け入れまして、2年間の日本語教育と『法華経』の教義の勉強、また各教化においての実習、現地のリーダーとして教育するコースがございます。

10年間、ハワイで苦労した中で一番大事だと思ったのは、「何が立正佼成会なのか」ということでした。信仰の本質とは何なのか？本質に日本の伝統的なものや日本の衣をつけてそのままハワイに持っていったのでは合わないところがある。本質的なものを見極めてハワイに持って行って、そしてハワイの衣をつけるという作業が大事なんだと10年間思ってまいりました。海外に出てみて、宗教の本質が問われる、そんなところで苦労したように思われます。

倉岡弘叔（高野山真言宗）



開教師の育成については現地でも二種類の考え方がありまして、ローカルの英語ができる開教師の方ががよいという考え方。これからは三世、四世、五世となった場合には、もう日系人といいながらもうアメリカ人なんだから英語ができ

なくてはだめだということも叫ばれています。一方、日本から来た開教師で十分だという考え方。問題は熱意であり、信仰の深さがあるかないかということが一番見られるのではないかということです。

言葉の問題はいつも日本から派遣する開教師に対して問題になりますが、最近行っているのは短期促成栽培ということです。2週間ぐらい本山で研修期間を設け、御詠歌や布教の実際など身に付けていただく。また、それまでに本山での僧侶養成の研修会には参加していただくような条件をつけて行っているのが現状です。

支援につきましては、現地のメンバーの数も減り、運営も大変だということで、10年ぐらい前から開教府あるいは開教別院、開教師にそれぞれ活動助成金を出すようになっていきます。

私たちは、2002年にハワイ開教100周年事業を催しましたが、ハワイと日本の関係において多くの課題が残されました。まず、開教府と本山の密なる交流。そして、世界平和の祈りということに関して仏教教団がもう少し敏感になるべきだということです。また、情報発信でも現地での仏教センターなどができれば、もう少し現地の方々理解をしていただければと考える。

吉田宏得（曹洞宗）



私がハワイで布教活動を行う際、よく考えるのは「お坊さんとはなんだろう？」ということです。ハワイではお坊さんのことを“先生”と呼びます。ハワイでは、日本の言葉を子孫に伝えることが大事だと思われてきました。このため、お坊さんが日本語学校の先生を務めることが第二の職務でした。このため、いまでも先生と呼称されます。先生とは自分の心を導くために先に進んで生きていく人という意味も含まれます。

そして病院の訪問も、私たちの大きな使命となってい

ます。日本で、私が衣を着て友人のお見舞いにいったら、病院の人に黙って霊安室へ案内されたことがありました。しかしハワイでは、病室に聖職者が行くということは、その信者の誇りになることなのです。これは大きな違いです。

では、このように異なった宗教環境の中で、曹洞宗はどうすればよいのでしょうか。特に日系三世以降は、家の宗教という意識が薄くなり、自分の意志で宗教を選ぶ傾向が強くなります。我々も未だ試行錯誤の状態ですが、私がハワイで実践していることの一つに“握手”があります。握手は自分の手と信徒の手との“合掌”だと考えています。信徒との距離を保っていたら握手はできません。握手をして頭を下げることにより、信徒との距離が近くなるのだと思います。このような小さなことの積み重ねが大切なのではないでしょうか。

また、後進の指導も重要な課題になっています。ハワイにもミニスター（開教師・国際布教師）になりたいというものは多くいます。ハワイ曹洞宗寺院連盟には、ミニスタートレーニングプログラムというものが存在しますが、まだ曹洞宗宗侶の資格を得たものはおりません。日本では車の運転免許証は全国どこでも、同一ですが、アメリカでは州ごとに運転免許証は異なります。しかし、それはどの州でも通用します。ハワイの信徒を満足させるミニスターを育てるためには、このような柔軟性をもったシステムも必要なのではないでしょうか。

ところで、ハワイの曹洞宗は今年百周年を迎えます。私たちは、それを祭典としてだけではなく、今までの100人以上の開教師の方々に対する報恩、そして新しい第一歩の始まりとしたいと考えています。SZIの皆様もどうぞ協力よろしくお願ひいたします。

（文責：SZI事務局 館盛寛行）



宮城県曹洞宗青年会ハワイ移動研修会

ハワイの病院で活動する宗教者から聞く

静岡市法幢寺 住職 秋田 弘 隆



曹洞宗宮城青年会一行と我々 SZIスタッフは、ハワイ曹洞宗別院、そして日本領事館の前を通り過ぎて、すぐ山手のクアキニメディカルセンターに到着した。ワイキキのきれいなホテルとなら変わらない。看板がなければホテルと間違

う程だ。建物の正面にはヤシの木が風に揺られ、青々した芝生が張られ、水が流れる安らぎの空間を作り出している。ロビーも明るく、消毒液の匂いは一切なく、壁は薄いレモン色で統一され、廊下の壁にはきれいな絵や写真、楽しい絵が飾られ、歩いていて気持ちが良い。

小柄な中国系2世のPublic Relations (広報) の Mrs.Donda Spikerが私たちを笑顔で出迎えて下さる。

今回の研修は、病院見学のみのはずであったが、全員お坊さんでホスピス、ターミナルケアに興味があり、又お檀家さんの最期を看取るケースもあることを話すと、Mrs. Spikerが気をきかせてくれ、病院常駐のチャプレン(chaplain=患者の悩みを聞き、医療者と家族の間を円滑にし、精神的、霊的なサポートをする宗教者、またはその領域において特別なトレーニングを受けた人)が次の用事まで10分程時間があるので会ってみたいかとのこと。早速、チャプレンの事務所へ向かうと、なんと、たまたま現職チャプレンのRev. Chinenチネン氏と、彼に会いに来ていた、この病院の元常駐チャプレン・Rev. いかず氏にお会いすることが出来た。二人のベテランチャプレンからお話を頂けるといことは、またとないチャンスであった。

アロハシャツ(因みにアロハシャツはハワイでは正装である)にスラックス姿の二人と握手をした後、病院の講堂へ移動し、話はかなり突っ込んだものとなり、10分を大幅に越えて、40分程のお話と質疑応答で大変有意義な時間をもつことができた。その後、病院施設見学をさせていただいた。

私が、通訳を勤めさせていただいたが、宮城青年会員が質問した事、また私が直接聞いたことで特筆すべき事、興味深い事を以下に列記する。

(1) 入院の際、患者は名前の下に自分の信仰する宗教を必ず記入する欄がある。

因みに当病院では、現在35%仏教徒、18%プロテスタント、15%カトリック、その他である。

(2) 病院には必ず常駐のチャプレンがいて、24時間体制、シフトでカバーしている。

(3) チャプレンの仕事は、患者の心のケアをするカウンセラーである。医学の専門家ではないので、医学的なことは全て医者、看護婦にまかせ、あくまで心のお世話、ケアである。チャプレンも医者、看護婦とともにメディカルチームの一員として活動する。単独では行動せず常に医者、看護婦、患者の家族と意志疎通、コミュニケーションをとりながら行うチームアプローチが基本である。当病院では7階が全室ガン患者専用のフロアーである。

(4) アメリカでは100%、本人にガン告知をする。治療にあたって本人の自覚が不可欠とのことからである。日本ではまだ、環境、本人の性格などを家族が色々考え、本人への告知率は30%ほどというのが現状である。

(5) エリザベス・クブラー・ロス女史(Elizabeth Kubler Ross=アメリカの精神科医)の有名な著書「On death & dying」が大変参考になる。因みに、日本語訳は『死ぬ瞬間』読売新聞社。

ガン宣告された人は、ショック→拒否、否認→怒り



クアキニ病院 正面から

→悩み→受容 という過程を踏むケースが多い。しかし、患者全員が最終的に事実を受け入れられるわけではなく、なかにはharsh death (= 壮絶な死) を迎える人もある。

(6) ホスピス、ターミナルケアでのチャプレンの仕事はとにもかくにも患者の話に耳を傾けること、聞くこと、そして励まし、支えていく。まず患者の一生を語らせること。苦しみ、怒りも全て出してもらおうよう、きくことに徹する。そして、患者の気持ちを大切に心身のケアにつとめる。そして、最後には、振り返ってみると素晴らしい人生を送らしてもらった、悔いは無い、と思えるようになると安らかな最期を迎えられる。心が落ち着いてくると、お祈りして欲しいというリクエストが多い。「死の医学=看取りの医学」は末期の痛みを苦しむ患者を癒し、死をむかえるまで寄り添うという医学だが、大変時間がかかり、辛抱強い学びのプロセスであるが、医者、看護婦よりチャプレンは一人一人に対応できる時間が長いので、慈悲の心をもって接していくことが大切。

(7) チャプレンのもう一つの大切な仕事は病院のスタッフの心のケアである。スタッフが精神不安定では患者に良い治療はできないとの考えからである。

(8) Rev.Chinenチネン氏は病院での仕事は教会で一人の牧師でいた時よりもやりがいがあるとのこと。なぜならば多くの人に必要とされているから、とてもこの仕事を楽しくさせてもらっているよと笑顔で答えてくれたのが印象的であった。

(9) 当病院はNPO(非営利団体)であり、院長のものではないので、CEOがいてboard of directors(理事)達がいて運営されている。医者、看護婦、チャプレン、その他のスタッフ、皆平等である。



病院内のチャペル(礼拝場)
仏教、キリスト教等引き戸で変更できる



チャプレン(牧師)から説明を受ける 左側秋田師

(10) 残念ながら現代の日本では、病院でのお坊さんの姿は縁起の悪いシンボルのようで、又末期に至った患者は、坊さんによって安らかな死が得られるという発想がない。更にお坊さんからの働きかけもまだまだ少ないのが現状である。アメリカでも「チャプレン=死」という一般的な患者の見方がある。そもそも患者は病院にチャプレンがいることは知らないのである。

従ってチャプレンと面会すると、「いよいよオレも死に近いのかな」という意識をもってしまう。しかし、そこから先述した学びのプロセスであり、怒り、苦しみを自然にまかせて全部吐き出させていくことが大切である。時には理解できない家族とは話をせず、チャプレンだけを頼りにする患者もいるとのこと。とにかく患者の気持ちのおもむくままに逆らわず、聞くことである。あまりの怒り、苦しみにチャプレン自身逃げ出したくなることもあるとのこと、しかし、怒りもチャプレン個人に対してではなく、患者が直面している今の現状に対して怒っているので、don't take it personally, 自分を責めるな、とのアドバイス。余談であるが、私の師匠はハワイのヒロ大正寺に国際布教師として赴任しているが、月2~3回必ず病院訪問日がある。これは療養見舞いと精神的激励や一大事に備え遺志を聞くことにある。これには病院側も、患者(この場合、教団メンバー、檀信徒)も喜んで受け入れてくれる。

(11) 患者さんがもし仏教徒で菩提寺のお坊さんにきてもらいたい時は、すぐ連絡して来て頂く。それぞれの宗教、信仰によって対応する。

(12) チャプレンになるには「Clinical Pastoral Education」という1年間の実地体験をしながら勉強するプログラムがある。志願者にとって広く門戸が開かれている。



病院内を案内をして頂いた広報担当者
後ろのカレンダーには、入院患者用プログラム

る。アジアやアフリカ、中東からも留学にきているとのこと。資料を入手しましたので、詳細はSZI事務局までご連絡下さい。

(13) 病院内にチャペル(礼拝室)があり、仏教徒には正面にお釈迦様、キリスト教徒には十字架が拝めるよう、お参りできるように工夫されている。日常の礼拝または、ミサが行われる場であり、感覚的には病院内のお寺、または仏壇、そして、教会といったところである。

ここでクアキニメディカルセンターの歴史及び医療サービスについて簡単に説明する。

当院は、木造2階建て、38床のベッドの「日本慈善病院」という施設から始まった。

この施設は、1900年(明治33年)1月にチャイナタウンをほぼ壊滅させた大火で住居を失った日本人プランテーション労働者を救済するため、同年4月に「日本人慈善協会」によって創立されたものである。

日本慈善病院は次第に成長し、1917年にクアキニ通りにある現在の敷地に移動、1975年には、創立75周年と市民へのサービス拡張を記念して「クアキニメディカルセンター」と改称した。現在、クアキニメディカルセンターは、日本人移民が創立したアメリカ国内に残る最後の医療施設となっている。クアキニメディカルセンターは、クアキニヘルスシステムの傘下にある非営利団体法人であり、質の高いヘルスケアサービスを地域社会に提供することに専念している。クアキニのプログラム、サービスは、民族・文化の違い、性別、心身障害の有無、年齢、宗教の違い、支払い能力にかかわらずすべての人々の為に設けられている。

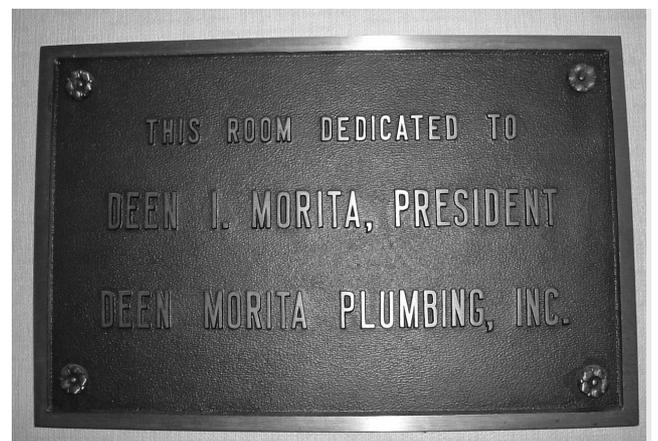
また、同じ敷地内に、クアキニ高齢者センターを設立

し、医療および社会的援助を必要とする高齢者のために、広範囲にわたるプログラムを用意している。21世紀に入って増加する高齢者医療対策に、ハワイ州やアメリカ本土の病院が始めるはるか以前の1970年代から注目し、実績をあげている。具体的には、190床の高齢者療養施設、34床の高齢者入居ホーム、そして、アダルト・デー・ケア・サービスである。

今回の研修で、あらためて「いのちとはいったい誰のものか?」という根源的なことを考えさせられた。

日本の現代社会では、最先端の医療機材に囲まれ、最新の医薬品を投与され、1分でも1秒でもいのちの延長つまり「延命」を目標としている。しかし、日本でも最近よく耳にするターミナル・ケアとは、死にともなうマイナス部分を解消していく条件を整備しながら、死に向かう人が残されたいのちを精一杯生きるため、そして、よりおだやかで安らかな死をむかえるためのサポートをすることである。つまり、「いのちの長さ」という観念から「いのちの質」に重点をおくのがホスピス、ターミナル・ケアである。医者中心の医療から、患者中心の医療への転換の必要性、また患者をとりまく家族のストレス、悲しみの緩和、患者自身のいのちの輝きを支え、こころのケアをするチャプレンと医療関係者のチームアプローチの重要性をあらためて認識する機会になった。自分のいのちは自分のもの、という基本から始め、いのちの最期は自分自身で選び取っていく。

病院内のチャペル(礼拝堂)にしても、人々の日常生活に祈りの場として、宗教がしっかり根付いている、また社会の中で認知されている結果だと思う。9. 11のニューヨークでのテロでも、消防士と共にチャプレンがビルの中に入り、励まし祈りを捧げ、救出をサポートしていた。日常生活の中のいのちの現場に我々宗教者の果たす役割があると思う。



各病室の入り口には、寄付した方の名前を提示
仏具に寄付者名が入るのと同じ感覚?

ドイツレポート

マリア様に抱かれた街で見た禅僧の夢と現実 ～ドイツ普門寺の願い～

SZI会員 穴戸 由布子



2002年10月26日、27日、ドイツ・アイゼンブッフの大悲山普門寺において、毎年恒例の紅葉祭りに合わせ、高祖道元禅師七百五十回大遠忌法要、酒井得元老師七回忌法要、記念碑除幕式、大遠忌慶讃記念講演が開催されました。

日本からは僧侶20名（大本山永平寺から5名）、一般21名の合わせて41名の参加があり、また、ドイツからは100名以上の参加がありました。

普門寺は20年以上ドイツに在住し、禅の指導を続けられている国際布教師中川正壽老師の悲願が実を結び、1996年に設立されました。老朽化した旧ホテルを購入し、改築を重ね、翌97年宗務庁の認可を受け、大本山永平寺宮崎奕保不老閣猊下を御開山として普門寺における布教活動が始められました。

普門寺のある地域は、キリスト教、特にマリア信仰の中心地であり、宿泊したアルトエティングには黒いマリア様を安置した教会がありました。この街は由緒ある土地で、キリスト教徒にとって一度は礼拝のために訪れたいと願う地ということでした。このような街でただ一人、禅の布教をはじめられた中川老師のご苦労に、参加者全員ただただ感心してしまいました。中川老師も神父や街の人々からの信用を得るまで、日本人としてや、仏教徒としてではなく、同じ人間対人間という立場で対話を続けていったとおっしゃっていました。

このマリア信仰の強い地域で禅の布教を続けることができたのは、すでにドイツ語文化圏にはチベット仏教や上座部仏教が浸透していたこと、弟子丸老師のお弟子さんたちによる活動や、アメリカの禅指導者の活動により曹洞禅や公案禅が弘められていたこと、また、東西霊性交渉としてキリスト教や仏教など宗教間の対話が進み、教会内でも神父による禅（瞑想）の指導が行われていたこと、そして、教会に不信感を持つ人々が新たな心の依り所として坐禅会などに参加するようになったことなどが要因ということでした。また、大悲山普門寺の名が示すように観世音菩薩の大慈大悲の信仰を中心とした布教が、マリア様の慈愛の信仰と重なり、より地域の人々の理解を得られたのではと感じました。

アイゼンブッフに建てられた普門寺は老朽化した旧ホテルを購入したもので、施設としては本館に衆寮・個室

(6室)・小坐禅堂・事務室・図書室・作業室、別館に本堂・食堂兼ホール・台所・客室(10室)がありました。しかし、本堂には御本尊である釈迦牟尼仏が簡単な須弥壇に安置され最低限の仏具があるのみで日本で慣れ親しんでいる本堂とはかけ離れたものでした。また、室内の配管も予算削減のためむき出しのまま、少し前までは雨漏りがひどく2階の天井が青カビだらけになってしまっていたとのことでした。何もない老朽化したホテルを少しでも修行道場としての活動ができる状態にするため、日本とドイツを往復しご寄付をいただいたり、地元の方々によるボランティア活動に支えられながら現在の状態まで改善してきたとのことですが、施設としてはまだまだ未完成のものでした。しかし、ドイツに、またヨーロッパに禅を弘めたいという一人の禅僧の願いと努力によって、異文化の地でここまでの施設を整え、人々の理解を得、禅の活動を行えるということは、感動でもあり、大きな発見でした。私だけでなく、参加者のほとんどの方々が中川老師のご努力に感動し、自らの生活を反省していました。

20年以上のご努力の賜として開催された今回の法要ですが、26日の紅葉祭りでは大本山永平寺国際部部长松永然道老師により「高祖道元禅師750回大遠忌について」、駒澤大学教授・泉岳寺住職小坂機融老師により「酒井得元老師の思い出」の記念講演が行われました。講演後の懇親会では手作りのケーキをいただき、ピアノとヴァイオリンによるコンサートが催されました。27日は松永老師を導師として高祖道元禅師七百五十回大遠忌法要と、小坂老師を導師として酒井得元老師七回



普門寺本堂にての法要



記念碑

忌法要・中川老師のご両親に対する法要が行われました。その後、宮崎突保不老閣下のご揮毫になる書「功德海中一滴を授く」「善根山上一塵を積む」の2点と故酒井得元老師ご揮毫の「直心」の字を彫った記念碑、計3点の除幕式が松永老師を導師として行われました。さらに、元駒澤大学学長奈良康明老師により「ブツダから道元へ」というタイトルで記念講演が行われました。これらの法要を日本の方々をお招きして行うことは、中川老師の悲願でもあり、とても感動しておられました。また、現地の参加者も多く、法衣姿の僧侶による法要を間近に見て驚きを隠せない様子でした。

中川老師の今後の願いとして、一つには普門寺の施設をさらに改善し、専門修行道場として整備していくことだそうです。坐禅修行、仏教学習と作務を日課とし、さらに安居期間を設け、集中的な修行・学習を定期的に行いたいということです。特に、現在老朽化の著しい納屋を早急に改築し、寝袋一つでも宿泊でき、接心などに参加できるような施設を整備したいということです。そして、日本の多くの若者にも来ていただき、異文化の中での禅、また、異文化の中から日本や自分自身を見つめ直す体験をしていただきたいとおっしゃっていました。もう一つは禅を中心とする仏教文化ゼミナールセンターとしていくことだそうです。現在でも大学やカルチャーセンター、教会などに赴き、様々な活動を行っておられるのですが、禅に興味を持つ人々が多数いる中で、禅を指導できる人が少なく、学習する環境が整っていない現状があるそうです。普門寺においてもギリシャやハンガリーから接心に参加しにくる人もおり、またポーランドでは一度の接心に400～500人の参加者が集まりますが、アメリカから指導者が来て禅の指導をしているとのこと。オーストリアでは、仏教を宗教として認め、戸籍に記載を許可しているそうです。そのため大学の授業では仏教の時間が設けられ、中川老師も講義を行っています。また仏式の結婚式も行われているそうです。周辺の国々に比べ、ドイツ国内はまだ仏教徒に対する対応が遅

れているようですが、普門寺を中心として、一般参加者を対象に、様々なタイプの接心・坐禅会を頻繁に行い、また、定期的に仏典集中講座やシンポジウムを開催し、仏教を学べる環境を整えていきたいとお話していました。

今回のドイツ普門寺の行事に参加して最も感じたことは、「自らその地に行き、現地の人々と交流し、現状を直接見聞きしなければ、なかなかその努力や苦勞が分からない」ということです。私自身、中川老師とは1999年にアメリカ・スタンフォード大学で開催された道元禅師シンポジウムでお会いし、ドイツで活躍されていることはお聞きしていましたが、実際、中川老師のご努力やご苦勞は分かりませんでした。しかし、今回、直接普門寺の現状を見るご縁をいただき、中川老師からその思いを伺うことができたことで、はじめて中川老師の願いを支援したいと思い、また、日本の多くの人たちに伝えたいと思うようになりました。このような思いは私だけでなく、参加したほとんどの方々の感想であり、少しでも普門寺の支援をしたいと旅行中に法堂太鼓が寄付されました。また、帰国後、奈良老師を会長とし、小坂老師を副会長、児玉重夫老師、来馬正行老師、吉岡浩子さんを事務局として「ドイツ普門寺の会」を発足し、支援していくことが決まりました。本会では経済的援助のみでなく、各寺院で使用しなくなった仏具を寄付させていただくことも企画しています。

是非、日本の多くの方々にもドイツ普門寺を参拝していただき、直接ドイツの風土に触れていただけるよう祈念いたします。そして、多くの方々に普門寺の活動を理解していただき、共に支援していただけることを願っております。合掌

日本連絡先：妙寿寺

〒553-0002 大阪市福島区鷺洲2-15-10

TEL 06 (6451) 6659/FAX 06 (6451) 6695

日本寄付受付先：郵便局振替口座

ドイツ大悲山普門寺 00940-8-310590



アメリカの仏教書

第4回／禅仏教篇④

アメリカ人の眼に映った片桐老師

マサチューセッツ州 ヴァレー禅堂 堂頭 藤田一照



片桐大忍老師

今回は、片桐老師ご自身がアメリカ人の聴衆に向けて語られた法話を弟子達が編纂して出来上がった二冊の本を紹介しました。今回は片桐老師に出会った人々が描いた老師の姿をいくつか紹介してみよう。

現在、アメリカ人仏教修行者たちの『回想録』(あるいは『回顧録』)とでもいうべき種類の本がかなりの数で存在しています。そこには、自分がどのようにして仏教に関わるようになったか、修道の途上で起こったさまざまな出来事のこと(たとえば法を求めて仏教の本場であるチベットやビルマ、日本などに滞在した時の経験、深い洞察を得た時のことなど)、自分が直接に出会ったさまざまな仏教の師匠たちや同行者たちをめぐる数々のエピソード、そういう出会いを通して学んだこと・疑問に思ったこと、失敗談、修行の深まりの過程、それらの経験に基づく彼らの仏教観・修行観などが自伝風なスタイルで書かれています。単なる自慢話に近いものやゴシップ集のようなものから、西洋人として仏教を学修する本質的困難さが的確に描かれているものや仏教の価値を高く評価しつつもその後進性や閉塞的現状を鋭く批評できているものまで、その質の良し悪しはさまざまです。しかし、その質はどうあれ、少なくともわたしにとってはどれも読み物としてけっこう面白いものが多いですし、アメリカ人のメンタリティや仏教に対する要求・熱意・失望などの背景がわかり、たいへん参考になります。また、外部の人間にはうかがうことのできない仏教僧院での具体的な生活の様子や実体験にもとづく瞑想行の内的・心理的過程についての詳細な記述などが得られる貴重な文献になっているものもあります。日本の仏教書の中にはこういうジャンルのものはあまりないのではないかという印象をわたしは持っています。もしそうならこういう本の存在はアメリカの仏教書の特徴的傾向の一つといえるかもしれません。こちらの本屋に入ってまず気がつくのは自伝・評伝セクションの充実振りですが、そういう現象とおそらく関連しているのではないのでしょうか。

さて本題に入りましょう。まず、Marian Mountainという女性の書いたThe Zen Environment: The Impact of Zen Meditation (『禅的環境—坐禅の感化』)という本をとりあげてみます。初版が出されたのは1982

年でいまは残念ながら絶版状態のようです。彼女はすでに本欄で紹介させていただいた鈴木俊隆老師の弟子に当たりますが片桐老師にもついて禅を学んだ人です。70年代のアメリカで大ベストセラーになったZen and the Art of Motorcycle Maintenance (『禅とオートバイクの修理技術』邦訳があるはずですが)という哲学的(?)自伝的小説を著したRobert Pirsigが本書の序文を書き、紹介文を片桐老師が書いています。(この二人もまた師弟の間柄です)この本はMarianさんがたどった「禅に導かれたところの旅路」を描いたものです。このなかに散見される片桐老師についての記述をいくつか拾ってみましょう。

- わたしの師の一人である片桐老師は弟子達によく次のように注意しておられた。「もし川の水源にたどりついても、川の全体を理解したなどと思てはいけない」(たとえ自己を見出したとしても、それで自己の全体をつかんだと思てはいけないということかと著者は解している)
- 片桐老師は「打坐」とはto sit up to the hilt(徹底的に坐ること)だと説明された。(up to the hiltという熟語には「刀の柄元までずぶりと」という意味があり、そこから転じて「徹底的に」という意味が出てきた。この引用は彼女が只管打坐について「坐ることそれ自体のために誠心誠意をもって坐る」という理解を述べるところでの引用)
- エゴの入り込む余地のまったくない坐禅をどのようにして行ずればよいかについて禅の師が与えられる最上のアドヴァイスはおそらく片桐老師がかつてわたしに与えてくださった「No Aims; No Expectations! (当てを持つな、期待をもつな!)」ということだろう。
- どの龍(覚者)もそれ独自の指導スタイルを持っている。わたしの最初の師である鈴木老師が弟子を教えるスタイルは優しく親切で春の雨のようだった。二番目の師であるたつがみ老師のスタイルは力強く人を揺さぶるようなもので地震のようだった。片桐老師のスタイルは古典的で非のうちどころのない洗練されたものだった。知野弘文老師は人を魅了するような、人のよさにあふれた純なスタイルをもっておられた。(彼女が学んだ師たちの独自のスタイルを述べるところでの引用)

もう一冊とりあげたいのはNatalie Goldbergという女性の書いたLong Quiet Highway: Waking Up in America (Bantam Books、1993)(『長く静かなハ

イウエイアメリカで目覚めること』という本です。NatalieさんはWriting Down the Bones (『骨に書きつける』)というライティング(書くこと)についての指南書(坐禅とおなじ態度で書くことの修行法を教える非常にユニークな本)で有名な詩人・随筆家・教師・小説家です(最近では絵も描いているようです)。彼女は片桐老師の禅の影響を強く受けつつ「書くこと」を自分の天職かつ修行として深めてきました(「・・・片桐老師は禅修行におけるわたしの大師(Great Teacher)です。そして書くことにおいてもわたしの大師(Great Writing Teacher)です。彼を通してころのなんたるかを多少とも理解できたのですから。ここではすべてのもの書きたちがそこを通らなければならない領土なのです・・・」)。本書は、書くことこそが自分の道であるという発見と片桐老師が指導する禅の修行(師の遷化までの12年間)とを通して、実存的な深き眠りから次第に覚醒していくプロセス(「長く静かなハイウェイ」)を記した彼女の「精神的巡礼の記録」といえるでしょう。本書冒頭の献辞はもちろん片桐老師にささげられています。「わたしの師 大忍片桐老師にささぐ 限りない愛と感謝をもって・・・」わたしは片桐老師が具体的にどういう接し方をして弟子達を指導していたのか、その実例を本書によって初めて知ることができました。

残念ながらもあまり紙幅がありませんのでこの本に載っているエピソードをいくつか紹介するにとどめます。

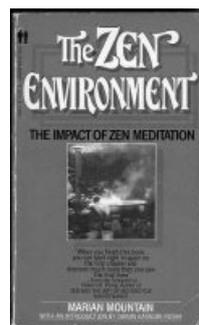
- 老師と個人面談をしたときのこと。約束の時間に遅れてあわてて禅センターに飛び込んだ彼女は老師が台所でずいぶん以前にハワイから届いた蘭の花に水をやっているところに出くわします。「・・・『老師』わたしはその花がまだ生き生きと咲いていることに驚いてその蘭を指差しながら声をかけました。『ハイ』と返事をして老師は振り返り、にこりと微笑みました。わたしは彼のからだのなかの細胞が一つ残らずここに在るのを感じました。「あなたが世話をするものはなんでも長くもつのですね」。わたしの口は大きく開いたままでした。・・・目の前の人物は完全にいまここに在る。わたしはいままでいちども現在に生きている人間の実物に会ったことがありませんでした。ですから「今此処に在る」といってもそれがどういうものかまったくわかっていなかったのです。しかしこの老師は端的にここに存在している・・・彼のすべてが今此処に凝集し目の前の花に集中している。彼のこういうありかたはレンガの壁のようで、わたしはそれにぶつかってバラバラになって砕け落ちたような気がしました・・・」この時、彼女はこの人こそわたしの師であると認めたのです。
- 「・・・老師は絶えずこう言われました。『わたしたちの修行のゴールは毎刹那、しかも永遠にわたって一切の衆生に対して顧愛のこころを持つことです』そしてその衆生のなかには椅子もペンも床も机も含まれているのです。わたしの友人が老師に「禅を学びたいのですが・・・」とたずねると「それはたいしたことではありませんよ。ここに本がありますね」老師は机から本を取

り上げます。「禅を学ぶというのはこの本を乱暴に放り投げるか、こういうふういきちんと置くかなのです」こう言って老師はその本を机の上に置きました。「禅とはそれだけのことなのです」友人はこう言いました。『彼が机の上に置いた時、その本はととてもリアルなものになった』・・・」

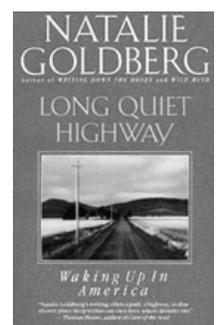
- ある時、ミネソタ禅センターで富裕な人や有名人を招待して寄付金集めのためのパーティを催しました。禅に対して良い印象をもってもらおうといういろいろ気を配って会場のお膳立てをしたところへ正装をした片桐老師が登場。禅センターのメンバーは老師が会場のみんなを感心させるような法話をされることを期待していたのだが「・・・そして、老師は話し始めました。『みなさんもうご存知でしょうが、われわれはみんないつかは死んでしまいます・・・』『ノー！老師、ノー！』わたしたちはころのなかで叫びました。会場でお茶を飲んでいた招待客はいっせいに動きを止めました。空中で止まったままになった茶碗からは湯気がたちのぼっていました。老師はかまわず続けます。彼にしては長い話でした。話のはしばしで人生が無常であること、死が差し迫っていることに触れるのです。話が終わるや否や客たちは出口に急ぎました。寄付箱には一銭も入っていませんでした。・・・人々を喜ばせるために話を交えたり自分が本当だと思うことを話さないでおくなどということは老師には思いもよらないことだったのです。老師はよくわたしに言いました。『申し訳ないけど、わたしはあなたを喜ばせるけれど真実ではない‘キャンディ’はあげません。あなたの幻想にえさを与えるようなことはしません』と・・・」

片桐老師の生き方や態度はここでとりあげたMarianさんやNatalieさんにとどまらずさらに数多くの人々の人生に深く永続的な影響を残しました。こうして人々の心に蒔かれた無数の禅の種がいつの日か成長しそれぞれの花を大きく豊かに咲かせることを祈らないではいられません。老師は「大きな仕事」をされました。いや、今もされているのです。合掌

(お詫び：前回「ミネアポリス禅センター」と書いてあった箇所は「ミネソタ禅センター」の誤りでした。お詫びして訂正いたします)



THE ZEN ENVIRONMENT



NATALIE GOLDBERG

寄付者・会費納入者名簿 2002年11月1日～2003年5月10日まで

補助金ありがとうございました。
曹洞宗宗務庁様

◆SZI会費納入者

新規会員並びに会員ご継続ありがとうございました。
(敬称略・順不同)

青山俊董 名古屋市 愛知専門尼僧堂
青山嶺雲 静岡市 山王寺
赤松利章 中野区 宝泉寺
秋田弘隆 静岡市 法幢寺
荒井禮一 深谷市 昌福寺
原江寺 徳山市 原江寺
飯島尚之 中野区 宗清寺
石井和泉 大田原市 女性寺
石井清純 市川市
石塚正道 飯能市 見光寺
石田大龍 熊谷市 龍測寺
石月聰明 郡山市 長泉寺
磯貝昌隆 文京区 喜連寺
伊藤仁志 安房郡 瑞岩寺
伊藤禪龍 松前郡 法徳寺
糸柳格順 藤枝市 洞雲寺
乾宗俊 小田原市 宗久寺
猪俣正孝 浜北市 高林寺
岩井恵澄 黒部市 東信庵
岩田弘之 袋井市 満願寺
上村映雄 中野区 保善寺
オーシャントラベル 豊島区
太田宏見 弘前市 宝積院
太田賢孝 新宿区 大龍寺
大場満洋 さいたま市
大場堅司 品川区
大八木春邦 鶴岡市 保春寺
大藪美美子 中野区 天徳院
大山陽堂 富津市 海竜寺
岡島博司 豊田市 永沢寺
岡本荘一 中野区 龍昌寺
長田敬道 静岡市 洗耳寺
垣内善勝 葛飾区 萬福寺
柿沼仁法 行田市 龍泉寺
加藤孝正 富士市 永明寺
加納博人 西加茂郡 天徳寺
川橋範子 豊田市
川村寿光 紋別郡 明光寺
岸世一 熊谷市 東竹院
木谷雅樹 渋谷区 瑞園寺
来馬規雄 豊島区 高岩寺
黒木 靖 江戸川区
黒田俊雄 栃木県 光真寺
黒田泰弘 大田原市
黒田武志 横浜市 善光寺
黒柳博仁 長野市 天周院
慶林寺 神奈川県
玄光庵 仙台市
建明寺 群馬県
広教寺 山梨県
小島孝尋 宮城県 大雄寺
小島宗光 伊万里市 本光寺
采川道昭 山形県 宝泉寺
佐久間顕一 京都市
佐瀬道淳 島根県 松源寺
佐藤昭次郎 新宿区
佐藤隆雄 岩手県 長安寺
佐藤信嗣 千葉県
篠田一法 名古屋市 長松院
島崎光雄 北海道 長林寺
昌雲寺 伊勢崎市
祥雲寺 桐生市 柳徳寺
荘司和成 宮城県
乗福寺 秋田市
神野哲州 名古屋市 地蔵寺
神龍寺 豊田市
随流院 横濱市
栖川隆道 大阪府 妙壽寺
菅原昭英 狛江市 泉龍寺
寿松木宏毅 平鹿郡 永泉寺
鈴木昭一 静岡県 西光寺
鈴木道雄 南秋田郡 自性院
鈴木豊子 中野区 青原寺
鈴木義明 横濱市 大林寺
関光禪 八千代市 観音寺
石夢工房 港区
高木乗正 成田市 永興寺
高崎直道 北区 静勝寺
高橋秀雄 埼玉県 広徳寺

高橋佳子 江東区
田上太秀 世田谷区
竹内博徳 吉川市 東泉寺
武田秀嗣 富士見市 興禅寺
館源峯 東大和市 浄仙寺
館定道 富山県 全龍寺
辰巳大勇 京都府 真福寺
館盛寛行 相模原市 梅宗寺
田中哲彦 広島市 聖光寺
田中良昭 港区 興源寺
田宮黎友 新潟市 宝積寺
田村優子 岩手県
長源寺 甲府市
長年寺 群馬県
長福寺 岩手県
統道雄 台東区
角田泰隆 世田谷区
東栄寺 愛媛県
東昌寺 埼玉県
尖秀雄 神奈川県 吉祥院
榑掘真英・久子 平塚市 浄心寺
富井清孝 十日町市 祇園寺
富尾智恵 海部郡 松月寺
鳥澤俊寛 神奈川県 泉秋寺
永井康允 愛知県 東漸寺
永井成典 愛知県 宝珠寺
長尾龍心 野付郡 長福寺
中小路開道 京都府 祥雲寺
中野東禪 横濱市 大岳院
中村見白 倉吉市 法清寺
奈良康明 台東区 瑞応寺
植崎通元 新居浜市 祥雲寺
西沢心人 豊島区 宗参寺
西沢宏道 新宿区
J T B 品川区
長谷川崇信 西白河郡 常在院
葉貫成吾 福島県 石雲寺
馬場義実 横濱市 倫勝寺
林辰哉 神奈川県 延命寺
原田道一 岐阜県 正宗寺
日比野道英 岡崎市 渭信寺
廣田賢也 行田市 嶺雲寺
福島伸悦 行田市 興徳寺
福島 B S 観光 福島県
福嶋幸隆 杉並区 長泉寺
福壽院 千葉市 東禅寺
福田恵文 台東区 正宗寺
藤井和彦 新宿区 観音寺
藤沢好文 長野県
宝持寺 鴻巣市
北条正興 茨城県
細川正善 耶麻郡 天徳寺
細川皓代 京都市 宗仙寺
松本力也 千葉市 海蔵寺
満友寺 秋田県
三浦賢翁 秋田県 大竜寺
南澤道人 福井県 永平寺
峯岸正典 群馬県 長楽寺
棟方清允 秋田県 大川寺
村上直文 北海道 禅昌寺
森田英仁 千葉市
柳岡峰 川崎市 全竜寺
山口義博 青森県 保福寺
山口淳一 群馬県 (有)オモロ
山口季晟 三島市 宗徳院
山田栄一 日立市 鏡徳寺
山田康夫 静岡県 盤脚院
山田茂雄 横濱市
山本現雄 京都府 正誓寺
横山敏明 横濱市 西有寺
吉岡棟憲 福島市 円通寺
龍潭寺 名古屋市
渡辺繁山 秋田県 松庵寺
渡辺禅悦 山形県 清林寺
渡辺亮正 愛知県 一心寺
慶松寺 山形県
浦敏之 世田谷区 駒沢大学高等学校
斉藤勇雄 山形県 永鷲寺
善寶寺 鶴岡市
宮崎拓行 山形県 延命寺
櫻井孝順 天童市 栄林寺
瀧田光久 横濱市 東林寺
大船観音寺 鎌倉市
佐藤孝子 山形県
難波真一 鶴岡市
成安寺 富士市

永源寺 富士市
黙仙寺 鎌倉市
小出忠孝 名古屋市 愛知学院大学学長
石田征史 横濱市 永明寺
飯島誠之 静岡県 秀源寺
松月院 板橋区
先照寺 富士宮市
宗清寺 新宿区
落合道正 鶴岡市 田種院
土田由美子 品川区
東武トラベル 台東区
藤木隆宣 世田谷区 仏教企画
井上正憲 富士市 伝心寺
梅田良光 鎌倉市 龍宝寺
安達良元 豊島区
冷泉寺 清水市
秀林寺 仙台市 1
近畿日本ツーリスト 中央区
日本旅行 港区
佐藤秀光 仙台市 大満寺内
奥野昭典 宮城県 広淵寺
吉田俊英 仙台市 洞林寺
我妻耕道 仙台市 江巖寺
輪王寺 仙台市
天雄寺 宮城県
真光寺 袖ヶ浦市
徳城寺 富山県
市川智彬 横濱市 興禅寺
高崎忠道 北区 静勝寺
大谷哲夫 新宿区 長泰寺

◆SZI特別寄付者

ご寄付ありがとうございました。(敬称略・順不同)

秀林寺 仙台市
福嶋幸隆 仙台市 長泉寺
武田秀嗣 富士見市 興禅寺
櫻井乘文 世田谷区 福昌寺
山田栄一 日立市 鏡徳寺
滝田光久 港北区 東林寺
富尾智恵 愛知県 松月寺
南澤道人 大本山永平寺監院
小笠原隆元 松本市 広沢寺
宮川敬學 宗務庁教化部長
鈴木包一 焼津市 林叟院
細川正善 猪苗代町 天徳寺
藤川享胤 鶴岡市 般若寺
佐藤昭次郎 新宿区
博林津龍 世田谷区 真龍庵
オーシャントラベル
加藤孝正 富士市 永明寺
倉岡弘叔 高野山 真言宗
福島伸悦 行田市 興徳寺
飯島尚之 中野区 宗清寺
西澤心人 豊島区 祥雲寺
櫻井孝順 天童市 栄林寺
瀧澤和夫 新宿区 東長寺
大藪美美子 中野区 天徳院
石月聰明 郡山市 長泉寺
福嶋幸隆 杉並区 長泉寺
小島孝尋 宮城県 大雄寺
市川智彬 横濱市 興禅寺

S Z I 動静報告

2002年12月1日
～2003年5月10日まで

- 12月3日 役員会・東京
- 2003年
- 1月7日 「ハワイ開教100年」連絡会議・東京
- 1月8日 役員会・東京
- 1月10日 会報22号発送
- 1月30日 宮城県曹洞宗青年会
- ～2月6日 ハワイ移動研修会へ同行 講師2名派遣
- 2月13日 宗務庁国際課との連絡会
- 3月3日 「ハワイ開教100年」連絡会議 長谷寺会館
- 3月26日 宗務庁国際課との連絡会
- 4月21日 大谷有為師帰国報告会・東京
- 5月7日 「ハワイ開教100年」 打ち合わせ・東京宗務所

※会報編集会議・事務局会は常時インターネットにて行って
おります。